

壊すことと創ること

特集

13

山田今次

〈横浜市民ギャラリー館長〉

横浜の文化について、なにがしかの意見をのべてみたいと思うときに、このようなことから書きださなければならないのは、はなはだ不本意なことなのだが、なにほどかの責任を感じず一市民としての私にとっては、文化そのものの形成を危うくする非人間的な向きのある現実について、常識的にも意識の底に考えておかなければならないことがある。東京工大の永井道雄教授の伝えるところによれば、昨年カリフォルニア大学の気象学者であるモリス・ナイバーガー教授が、空気の汚染に関して、緊急の警告というか、不吉な予言に似たことを語り、原子爆弾の製造とその実験は人類を危機におとし入れる。しかし、危険なのはそれだけではない、100年もたつと、いま大都市で問題になっているスモッグが、やがては全米をおおい、さらには世界をおおい地球をおおって、人類は知らず知らず息がたえはじめるかもしれない。というのである。

教授の説では、いまから工業に革命的な変化をもたせなければならぬとし、例えば、ガソリンで走る自動車を廃止し、性能のよい電気自動車を発明することなどを含めて、さらに政府による厳密な調査研究、抜本的な改革案の作成とその実施を提案しているという。永井教授はこれについて所見をのべているが、ナイバーガー教授の予言と

警告が正しいかどうかは、慎重な検討が必要である。としながらも「人間の生命を中核において文明を再検討する考え方の確立こそ何よりだいじなことなのである」としている。

私たちが、この明日の話題をきいて、それにしてもまだまだ100年も先の話ではないかなどといってすましていられないのは、人間が人間の生命の終りを知って、文化などというものを、どのようにかしようなどと考えるわけにはいかない、と思うからである。思いすごしということもあるが、少なくとも現実であり得ることとして思いをいたすならば、現在のような状況の推移のなかで、人間には対応性があって、いまにスモッグ下の状況にも慣れて平然と生活を営むようになるだろうなどは、考えるわけにはいかないのである。それには、次のような身近な事実にもよるものだが私たちは現在、大気の汚染によって、大気圏の谷間にあるといわれる日本に住み、私たちの、体内に、すでに2年ばかり前のデータによっても、肺に3,000カウントとか、胃に200カウントとか、肝臓に2,500カウントとか、その他、腎臓、すい臓、ひ臓、こう丸、卵巣等に放射能の量が蓄積されているということである。この放射能の恐ろしさについては、三重県立医大の、三上博士によれば、「いまや、すこしでも体内の放射能がふえるような危険な状態はさげなければならない、さもないと、みんな被爆者という状況も考えられないわけではない」といわれている。

そればかりではない。もっと身近なことをいえば、ついこの4月、横浜市の公害センターによって調査された桜木町駅前の、日に5万台の自動車排気ガスの記録によれば、一酸化炭素について問題となっている酸化鉛が、許容量いっぱい排出されて街頭の空気を汚染していることがわかったとのことである。私たちが、文明とか文化とかというとき、それが100年後であろうと、現在であ

ろうと、それが地球的なことであろうと、一都市の駅前のことであろうと、一方において、人間が人間による自滅の道を大きな足どりで進んでいるとき、国民とか市民とかよばれるある部分が、重い意味でも軽い意味でも、厭世的になるのはやむを得ないことであろう。私たちがよく見ききするデカダンスな文化とか頹廢的なムードなどといわれるものも、それらの形成にかかわるものを探ってゆくと、案外、正直なしかもひびわれた絶望感をもった人々をみるかもしれない。

私たちがしきりに、横浜の文化とか、開港100年の文化などについていうとき、どうしても先にのべた空間帯の汚染について考えてしまうのだが、思いだされるのは、同じこの横浜の100年前の自然の風光である。

明治維新の前後を通じ、イギリスの外交官として25年間を日本に滞在したアーネスト・サトウはいまから100年前に横浜に赴任してくるときの東京湾上からの風景をつぎのように描いている。

「翌日の早朝は伊豆大島東方の紺碧の海上をはしり、右手に鋸の歯のような格好をした鋸山の森林を望み、左手に浦賀の小さい入江を見ながら、広い湾を横浜へ向って進んだ。実に陽光さんさんたる日本晴の一日であった。江戸湾を遡行する途中、これにまさる風景は世界のどこにもあるまいと思った。濃緑の森林をまとった形状区々たる小山が南岸一帯に連なっている。それらを見おろすように、富士の秀麗な円錐峰が、残雪をわずかに見せながら1万2千フィート以上の高空にそびえていた。高くて気品のある大山や、その他の連山が、富士の西方の平野を画している。一方これと対して、低く這うような砂浜が右手へ急に曲って江戸の方角の水平線下にたちまちのうちに沈んでいった。」

こうして彼は、屏風浦の白い断崖を近くにみながら本牧岬を迂回し、漁師たちの日焼けした赤銅色

の皮膚がみえるくらい小舟の近くを通りすぎて碇泊地のすぐ沖合いに投錨するのである。

なんという、ゆうゆうたる風景であろうか、これらの空間に展開されている自然の美とその情緒とさらに清々しいなものかは、すでに私たちには伝説に似た世界なのだ。しかも、そのような素朴な風景を満喫していた外交官たちと私たちの間には距たること100年があり、偶然のようだが、さきほどのナイバーガー教授の予言と私たちの間にも、100年がある。私たちは、この最も素朴な自然と、りつ然とする暗黒の交響楽との、丁度中間にあって、文化の創造とか破壊についてかんがえているのである。しかし、風光を破壊し、空気を汚染することに貴重な100年が費やされてきたとは思いたくはないし、その風景をそのままとどめておこうとすることは、歴史の停止を意味することにもなりかねないが、結果としての話ということになれば、なんとも皮肉なことだが、どこかからか文明のバランスがくずれ、どこかからが狂った回転をしてそのようになったと思うよりほかにはない。それをいきなり政治に帰することは、いくぶん安易によりかかったものといえよう。

そんなことを考えていると、いきなりテレビが交通事故による死亡者の数を伝え、去年は1万数千人であったが、今年はずでに4千数十人となっており昨年同月にくらべてすでに4百人多いなどと報じているのである。

これは、100年がどうのこうのということではない。現前のことである。これは、スモッグとか放射能とか酸化鉛のことではなく、人がじかに人を殺してしまうことである。いや、してしまったことである。一体これは、どういうことなのか、だれにきいても満足に答えてくれるものはいない。しかし、人間が人間で組織している社会にその対策はないのであろうか、いや、対策はあるらしい。対策はあるらしいが、死者はあいかわらず毎

年増加するばかりである。死亡者の製造は巨大な機械のようにやすみなく稼働しているのだ。

このようになってくると、多少センチメンタルに、かくて文化の土壌は不毛というべきか、などということになりかねないが、いや、そうではない、とすぐ反射的に私たちにひびいてくるものがあるのは、私たちに、人間として人間を守り育てる文化性が根強くあるからであろう。私たちはこのような、文化破壊の逆回りの歯車に抵抗してゆく文化への意識を、私たちの内部に明確に刻みこんで進まなくてはならないし、この内部意識を文化の諸領域に生き生きと表現しなければならないだろう。

それには、横浜の文化として生産したものが、日本という大きな視野のなかでどのような方向性をもつかという切迫した問いがなされなくてはならないだろうし、そうした問いの積みかさねのなかにこそ、私たちの生きた伝統ははらまれているのであり、そこにこそ自由な表現の振幅があるのである。

そうはいっても、具体的に表現の方法を探るといふことになれば、さまざまなことになるだろうが、例えば文化の破壊を守るということもそのひとつだろうし、文化を創造し普及するというのもそのひとつだろう。また一口に創造とか普及といってみても、それにはそれで組織とか個性のある活動とかいうものもあろう。

作家大仏次郎は、昨年朝日新聞に寄せて、《破壊される自然》と題して風致の破壊に言及し、京都や奈良の近代化による破壊卑俗化に対して、これらの急いだ近代化は常に墮落となるとし、《近代化、工場化が進められるほど、我々の側に生命力たくましい自然が常に在ることが必要になってくるはずである。その時、草も木も、もう戻って来ない》と訴えている。そして、訴えるだけでなく《鎌倉風致保存会》の設立準備委員となって活動

しているのである。私たちにとっては、こういう行為がともなうことが必要なのであり、横浜における文化財、文化施設、文化域とでもいうべきものについても、やがてはそのようにか、またそれとはちがったやりかたでか、いずれにしても、鎌倉に似た組織とか活動とかが必要となってこよう。そして、大切なことはそれらの活動が市民のなかから湧きあがるようなものとして表現されることであろう。

また、別な諸領域のことをいえば、芸術＝文化の創造活動などがそうであろうが、これらはより複雑な矛盾に満ちたものであり、人間的な社会的な、においというか色彩というか、それぞれを含んでおり、中央意識とか地方性とかいう問題もあり、偏向的権威的な中央意識は除かれなければならないとするもの、それにしても閉鎖的な地方化も警戒しなければならないとするもの等、どこの都市どこの地方にもある問題であるが、私たちが期待するのは、横浜を中心とした芸術家、芸術家集団、エコール、グループ等が、アマチュアはアマチュアとして、専門家は専門家として、独得なかたちで日本の芸術＝文化に対する創造的発言を、日本的なものとして排他的でなく発言し、とらえてゆく方向性をもつことが必要であろうし、それらのことが私たちが芸術的にも文化的にも、広い視野にたたせることになるだろう。そして、それらの創造活動が市民的なものとして形成されてゆくならば、私の見解の甘さにもかかわらず、一応の展望をもった過程をたどることになるだろう。

また、もっと一般的なもっと生活的な、市民の日常活動などを考えてみると、例えば市民の自然な発意によって、小地域性をもたない、つまり地域にちぢこまらない《市民の家》などとよばれる任意の小グループなどをつくり、擬人化していえば、それぞれが個性をもった多様な文化活動を展

開するならば、それはそれらしい独得な味をもったものになるだろう。

《市民の家》は、あるものは5、6人であってもよいし、あるものは20~30人であってもよい。その会員には、主婦あり学生あり、学者があり芸術家があり、実業家もおれば、サラリーマン、労働者もいるという具合でもよいし、そこで読書会が行なわれ、ピクニックが行なわれ、ときには今日の話が話されてもよいし、市政のことが研究されてもよいだろう。また《市民の家》どうして合同でなされてもよいだろう。また都市住民の交換訪問を他の都市と行なってもよいだろう。私たちはそこで、義務的な組織とか、地域にしばられた会合とか会議とかから離れて、自由に意見を交し、自己を取り戻すこともできよう。

かつて横浜には、開港文化といわれるものが開花した。これについては他の人がふれるであろうが、それは歴史の目覚めとしてもあったし、港のもつエネルギーの発散としてもあったのである。それはまた、ハイカラ文化とか植民地文化などといわれるものだけではなかったろうし、それらの掘りおこしもまだまだ不十分なものであろうが、いずれにしてもそれが、単に横浜によって表現されたというよりは、日本の入り口として、日本の激動のなかの文化として、取り入れられ、発達し、そして衰亡していったのであろう。横浜の文化は、私たちの知らない、いつごろからか停止し、いつごろからか特異な色彩を失なったのであろう。

私たちがもしも横浜の文化の回復を図ろうとするならば、この停止し色彩を失なった横浜周辺の文化を掘りおこし、今日の歴史の光にあて、私たちの文化の糧としなければならないだろう。それとともに、私たちは新しい視点から再び横浜に、自由な国際的な文化の日本への入口として、なんらかの手段を発見する必要がある。少しくいす

ぎと放言になるかもしれないが、いま横浜に在住する40数カ国の外国人、または港に入ってくる外国人などを含めて考えてみて、それらと市民との自由なまたは計画的な懇談会、またはテーマをもってする座談会、意見交換会、または儀礼的にながれない社交の会等の開催などを考えてみるのがよいであろう。それがまた、ひいては新しい日本の文化にきっかけをつくるかもしれない。

私たちは最後に、つぎのことをひとつ付け加えておこう。これはもうだいぶ前のことだが、ある朝私が新聞に目を通していると、なんの欄であったか、伊勢湾台風がもし東京湾に上陸していたら、という仮定の記事であったが、その様子でいくと、横浜も大変な被害を蒙ることになっていたのである。

私たちは、現にすすみつつある破壊に対して守る必要があるとともに、破壊が予想されることについても対応しなければならないだろう。私たちが電子計算によって、その被害の状況をあらかじめ知っているならば、その被害は、まったくの受け身でなく受けることができるだろうし、都市計画といわれるものも、その予想図をもつことは必要であろう。

私たちはどのような場合にも、あり得たことが、無かったということで安心しているわけにはいかないだろう。